

Title	SE構文の類別とSEの内包
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 59 p.1-p.16
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80916
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

SE 構文の類別と SE の内包

出口 厚 実

Against the fortuitous homonymy hypothesis of *se* in Spanish

Atsumi DEGUCHI

In a recent article, Terasaki (1982) raises a strong objection against my analyses (1972, 1975, 1978a, b) presented in support of a unitary treatment of the various *se*-constructions in Spanish.

I will argue, however, that no independent justification can be given for the distinction drawn between the impersonal *se*'s and reflexive *se*'s by Terasaki. We cannot establish a cut-off point between one type of the *se* and the other, except arbitrarily, i.e. deciding arbitrarily that we are going to take one, rather than another, of the twenty-odd criteria as definitive.

The situation is rather that we are faced with a clear proto-function and a graded continuum of construction types from "auto-reflexives" through "decausatives", "passives" to "impersonals". It is shown that the unified analysis of *se*'s provides a more revealing account of the data than the analysis proposed by Terasaki (1982).

本稿は、一見多様に見える各種のスペイン語再帰構文の中に潜む統一的内包を発見しようとした拙論（1978 a, b）及び同（1972, 1975）に対する寺崎（1982）の批判への反論を主眼にし、新しい観点への論及は最小限にとどめるつもりである。

I

1. 拙稿（1978 a）を批判する寺崎氏の論理は概ね次の通り組み立てられている。

I. 出口（1978 a）の *se* 統一仮説は、すべての代名動詞構文が再帰辞 *se* を持ち、共通の統語プロセスで説明されるべきだと主張する (p. 336).

II. しかるに次の4種の代名動詞構文のみしか考察対象にしていない (p. 336).

- (1) Se edifican muchas casas en este barrio.
- (2) Se respeta a los ancianos.
- (3) Aquí se vive bastante bien.
- (4) María se lavó.

Ⅲ. ところが、Ⅱの統一的説明さえも次の問題をはらんでいる。

a) 出口 (1978 a) の再帰化は認められない (p. 340).

b) 目的語をとらない自動詞や copula には再帰化は適用できない。

c) 再帰化が適用できなければ、(2)(3)は統一説からはみ出す。

Ⅳ. 故にⅡの統一的説明は破綻する (p. 341).

Ⅴ. 従ってⅠの統一説は成立しない (p. 343).

1.1. 前記の諸点が事実かどうか、順次、細論していくが、本論に入る前に、寺崎 (1982) が述べている次の一節は拙稿 (1978 a) があたかも氏の論旨を誤解しているかのように受けとられる恐れがあるので、正確な引用で虚実の判定を仰がねばならない。

“出口氏は筆者 (=寺崎) があたかもこのような用法上の分類の各々に異なる se 形式を想定しているかのように批判されている。しかし、もちろんこれは誤解である。se の用法上の分類が規範文法的な配慮に基づく便宜的な性格のものであることは自明のことである (p. 337).”

寺崎氏が規範文法の便宜的な用語で用法分類をなされていたのではないことは、寺崎 (1974) の結論：

“いわゆる非人称の se は、この不定主語の形態素である。一方無生物の paciente を主語とする再帰動詞の se は、非能動を表示する形態素であるとみられる (p. 33).”

及び寺崎 (1976) の結論：

“再帰文の se は異なる機能を異なる原理に基礎をおいて、いくつかのタイプの文に実現している (p. 183).”

を一読すれば瞭然であろう。そこで、氏は明確に、異なる形態素、異なる機能・異なる原理の形式を設定されていたのであり、これは決して筆者の読み違えでないだろう。寺崎 (1976) の引用文中に見られる『再帰文の se』は、その先行文脈からして「すべての再帰的文の se」の意味である。この論文で、氏は変形文法が非人称の se を統一原理で説明するのに成功していないと主張した後、上記の結論を述べている。

そこで、“非人称の se” が仮に別格に扱われるべきものであったとしても、他のいくつかの se までは各々の別原理で、異なる機能をもつ、i. e. すべて独立した se であるという結論がどうして導かれるのか、拙稿 (1978 a) で疑問を提出したのである。寺崎 (1982) はこれに答えていない。

1.2. さて、本筋に戻り寺崎 (1982) の論点Ⅰであるが、出口 (1978 a, b) はどの部分においても“すべての再帰構文が共通の統語のプロセスで説明されるべきである”と主張した事実はない。筆者は (1978 a) で再帰文(1)～(4)のタイプが本質的な統語・意味的特徴を共有していると考え、それを明示的に表現したのを、寺崎 (1982) は著しく曲解しているようである。言い換えれば、氏が論駁しようとする統一仮説はもともと実在しない幽霊説、ないしは論難・論破のため

に作り上げられた「わら人形」である。この点はまた、多くの論客を巻き込んできた se 論争に対する寺崎氏の特異な認識ともかかわる。se をめぐる議論の主要な問題は、氏が規定するように、“se が単一の意味、単一の形式をもつか否か (1982, p. 335)” という点にあったのだろうか。いったい誰によって、どれほど多くの論者によって、“se が単一の意味をもつ” とか “多様なタイプの代名動詞文に生起する se が単一の意味の実現形態である (p. 337)” などと主張されたのであろうか。寺崎 (1982) の拙稿批判が以下でみるように悉く不成功に終るのは「いくつかの se 構文に共通特徴がある」という論旨を“すべての se が単一意味の実現である”と無残に擦り替えられた点に根本原因があると思われる。

1.3. 次に論点Ⅲ a) に移る。まず、拙稿 (1978 a) で提案した「再帰化」の考え方を再録する。(4)に類する自己再帰文に対し空欄直接目的語をもつ構造(5)を仮定した。

(5) Maria lava _____.

これは重出 NP を空欄化する「再帰化」の前段 (6A) に負う。これだけでは再帰辞が出現しないので、さらに (6B) が必要である。

(6) 再帰化

A 主語と同一指示の目的語は統語構造の語彙を空白としなければならない⁽¹⁾ (出口1978 a : 7)

B 動詞の意味に参与する成分の一つが語彙を持たない blank の構造が出現すると, se が挿入される (同 : 9)

(6)については寺崎 (1982) は述べる。

“同一 NP 削除によって消えたはずの節点へなぜか se が挿入され、また復活するという変形の適用上すでに問題がある操作をふくんでいる (p. 340)”

上述の非難もまた拙論の内容と無関係である。筆者は「再帰」に EQUI が適用されると述べたこともなければ、NP 節点が消えるとも復活するとも言っていないしまた考えてもいない。まして NP 節点へ se が挿入されると主張した個所はどこにもない⁽²⁾。仮に、寺崎氏の重大な三つの誤認に目をつぶるとしても、“変形の適用上すでに問題がある”と論詰する以上、氏は「変形の正しい適用」、「許される文法変形の厳密な範囲」を証拠を添えて示す義務を持つ (cf. 後述 2.)。反例、反証や何の根拠も示さない“問題がある”という言葉句は、少なくとも学術論文において批判の名に値しないことは言うまでもないだろう。

1.4. 論点Ⅲ b) は寺崎 (1982) の批判の最重点である。まず、氏の次の断定は事実の誤解に基づくことを指摘しておこう。

“ser, estar などの連辞動詞は、その統語型において目的語をとらないから、新しく提案された再帰化も適用しようがない (p. 341)”

拙稿 (1978 a) の枠組みで (7 a) は (7 b) のような基底をもつので、まさしく「再帰化」を経て生み出される。

- (7) a. Se está bien aquí.
b. — está bien aquí.

自己再帰文(4)とは(6B)の規則性を共有しており、両構文に同音形の *se* が生起するのが偶然でないことを説明している⁽³⁾。従って、“目的語をとらない云々”は無意味である。一方、寺崎(1974, 1976, 1982)の所説では再帰の *se*(4)と不定人称の *se*(7)は何ら交点のない別々の原理から発し、同じ再帰辞 *clitic* であるのは偶然の同音異義と片付けられるであろう。

寺崎氏は、再帰文(1)～(4)の各々のタイプの間にある統語・意味的類似性の連鎖を細説した部分に断章取義を行ない、筆者の提案の幹的部分(6)を全く無視されたいのである。

1.5. 論点Ⅲ b) は氏の誤解が作り上げた産物であることがわかった。その結果、Ⅲ c) も論拠を失う。ここで、寺崎(1976, 1982)で使用されている“再帰代名詞(化)”や“*se* 統一説”が、一連の拙論で用いられた時の内容と変質したものであることを再確認しておく必要がある。同氏の *se* 統一説批判は、変形文法(や他の新学説)があらゆる *se* 構文の深底にある単一の意味源泉、これを X_m と仮称することにしよう、を「*se*」へ導く一つの統語プロセス P_α (=再帰代名詞化)を示していない故、誤まりであるという論法で一貫している。

$$(8) \quad X_m \xrightarrow{P_\alpha} se$$

寺崎(1976, 1982)が再帰文(2)(3)(7)を再帰代名詞変形へ関連づけられないゆえに *se* 統一説が破綻すると述べる時、再帰代名詞は意味上 *coreferent* な同一名詞を承前するものと解釈されており、結局、反対論の骨子は、それらの文の基底に同一指示の2つの NP が無いと述べているだけである。筆者は(8)の図式を提案したこともなければ、(1)～(3), (7 a)の意味構造に二つの同一指示名辞を仮定していない。以上のことから寺崎氏の反論が *se* 統一説の正確な理解の上に立っているとはみなし難い。

論点Ⅲのいずれもが否定された。故にⅣも当然、成立しない。寺崎(1982)の結論 i. e. 論点Ⅴはその前提がそもそも虚偽であるから、Ⅳの成否と無関係に、空虚である。

2. 寺崎(1982)はまた格文法の枠組みを利用した拙論(1975)に再び論鋒を向けている。

- (9) a. Se vende las casas.
b. Se venden las casas.

(9)のような対文を‘非人称の *se*=(a)’と‘非能動の *se*=(b)’と別個の対立範疇に仕立てて独立させる寺崎(1974, 1976)とは反対に、両文(の *se*)には一つの意味内実があるという立場から行った筆者の説明に対し、“規則適用が変則的である(p. 339)”という点を繰り返す。出口(1978 c)で既論のとおり、「主語」「目的語」etc.の文法関係は定常不変な確然たる単位でなく、多因变量的で融通可能な概念であるという観点を支持するので⁽⁴⁾、二つの異なる“格”が同一文法関係の諸特性を分有するのは有り得べきことで、この現象が正にスペイン語のこの文類型に起きていると見た。主語をめぐる競合があればこそ、多くの informant が(9)の‘*se*’に某しか

の主語性を感じ、また他方で、se に clitic 症候群なる目的語性が見られ、las casas を主語とみるか目的語とみるか動揺が生じる事実の説明がつくのである。ところが‘不定の se’ 独立説（寺崎 1974, 1976）ではなぜこの 2 タイプの構文が共存し、また se や共起 NP の文法的地位が不安定なのか全く説明され得ない。

寺崎（1982）は筆者が再帰代名詞化に際し逆行代名詞化を行うという、新たな非難を考え出している（p. 339）。中間主語へ取り立てられた不定 Agent と共に主語を共有する las casas が対象格に残る分身との間に再帰化が働き、その後、対格へ指定され直接目的語と再解釈されると述べた（出口 1978 a : 3）説明がなぜ“逆行的に適用され異常”であるのだろうか。いずれにせよ、再帰代名詞化の controller は必ず左になければならないという寺崎氏の主張には不賛成であり、小論は、スペイン語再帰化の条件は基本的に文法関係と clausemateness にあり語順の問題ではないと考える。

寺崎の難詰はさらに続く：

“筆者（＝寺崎）が問題にしたのは、……se を導く規則の定式化とその適用の仕方である。

ある規則の例外性の契機がいかにあるかを力説しても、それは、その例外を例外としなければならぬ規則自体に問題があることを証明しているにすぎない（p. 339）。

“目的語代入という変形にも問題がある”

“この変形は ad hoc な性質なものと思われ、規則として普遍的な根拠をもっているかどうか疑わしい（p. 339）”〔下点（出口）〕

これらのコメントには、拙稿（1978 a, b）の見出した一般化そのものが、自然言語の規則性として認められないこと、又、例外的取扱いを許す規則の存在は認められないという、非常に強力な主張が見られる。ところが、ここで繰り返し表現されている、“疑わしい”“問題がある”という判断の根拠が、驚くべきことに何も示されていないのである。もちろん具体的な反例、反証の提示もない。拙稿（1972, 1975, 1978 a）は目的語代入や再帰化（6）が、意味上、談話構造上、また strategy の上で根拠と動機づけを持つことを論じた。寺崎氏はこれらに何ら反論を加えることなしに、“ad hoc”と断じ、規則の定式化とその適用のしかた、つまり生成プロセスの形式面の何らかの規準で容認されないという。筆者にとって重要なのは言語事実となぜそのような事実が生起するかの説明であり、「形式（化）」は二の次である。上述の非難は寺崎（1976）の次の言明を知る我々に奇異の感を与えざるを得ない。

“生成のプロセスに関する問題、言語学上の擬似問題、にはあまり関心がない（p. 179）”

いずれにせよ寺崎氏は拙稿の捉える規則性が形式として許されないとみなす以上、(10)の諸点に明確な見解をお持ちのはずであろう。

(10) 自然言語に

- a. 可能な文法規則の型式
- b. 不可能な文法規則の型式

c. 含まれるすべて規則が満足すべて最小限の義務的要請

氏は相当の論拠を添えて上の諸点を披露されるべきである。その明示がない限り、“……問題がある” “……疑わしい” は批判でも反論でもあり得ない。筆者は前の諸稿で検討したスペイン語文法の規則性が(10) a 及び c に合致することを望むものである。しかし、それらが合致する故に正しいと主張したことはない。例外的なもの（文法の中のいわゆる有標部分）としてさえも、およそ一般化として許され得ない故、問題だと主張する寺崎氏にこそ(10)を明確に示す義務が課せられているのである。

3. 次に拙稿(1978 b)に対する寺崎(1982: 343)の論評を見よう。“半降格・半昇格が ad hoc な工夫で” “関係文法の枠組みと相容れるか疑問である” と述べ、さらに筆者の議論は関係文法に則っていないと氏は結論する。

“出口のこの議論はいくつか弱点をもつ。第1にそれは変形文法と関係文法の諸原則と相容れない概念に基いている (p. 349).

なぜ半降格・半昇格が起きるのかについては出口(1978 c: 17) 及び(1981: 9) で触れたので再説しない。ここで要請されることは寺崎氏が正統的と認める‘変形文法’・関係文法 の諸原則を明確にすることである。これを無謬と判断されるからこそ、それに抵触するとして“疑わしい” “異常である” “弱点” と評されているのである。寺崎氏は、標準的な‘変形文法’や‘関係文法’がいったい何年に公刊された誰の著作にあるのかを明示し、そして、その諸原理が範典とみなすに値する正当なものであることを、少なくとも今問題になっている資料を処理する具体的 rule を書いて反対提案を行うことで証明しなければならない。このような手続きを欠いた評説は学術的批判となり得ないのである。

一つの構造レベル(層)で、同一 NP が二つの異なる(又は同一の)文法関係を結ぶ Multiattachment は Perlmutter (1981: 209) や Aissen & Perlmutter (1976) の関係文法で既に認められているが、この点が論争的になる可能性は当然あり得る。しかし寺崎(1982)はその中身を議論することなく、Perlmutter & Postal (1977) から離れるものは関係文法と相容れないと断言する。争点の一方の立場に言及することで、他方の見解が自動的に否定されると筆者は考えないし、ましてこれが“関係文法の根幹 (p. 343)” だとは思わない。氏は Multi-attachment や Copy Demotion (Advancement) を組み入れる記述とそれを排除するシステムを較べ、その説明力や内的動機を比較する労を惜しみ、ただ、ある権威者の一時期に表明された説に合致しないこと自体が批判されるべきだと考えているようである。他所で、後者の分析がスペイン語の再帰文にいか ad hoc で不自然な説明を強いられるかの具体的例示を行なったので(出口1981: 10~11)、再論を差し控える。

4. 本章の最後に、筆者がロマンス語・スラヴ語 etc. で再帰文の用法が広範にスペイン語と平行するのは偶然でないと述べた事に関しての寺崎(1982)のコメントを考察する。

“同じ再帰代名詞という形式が起源であれば、いくつかの言語がそれらから相似的な統語現象を平行的に発達させたとしても少しも不思議でない (p. 343).”

氏の論理によれば、同一起源（「語根」の意かどうか不明）の形式が、例えば再帰辞が、多くの言語で「過去」のテンス標識になったり、疑問代名詞として働いたり、補文標識の機能を雑居的に同時に示したとしても不思議でないらしい。

出口 (1972, 1975, 1978 a, b, c, d, e) は、言及した他言語の再帰辞や “se” が上のような意味で用いられていないのは暗合でなく、また同様に、それらが相互、受動、非人称などの下位区分的用法で同調するのは偶然でないと考えた。この点が寺崎 (1982) の見解と根本的に離反するし、勿論、se の統合観（氏のいう統一説ではない）と互助表裏の関係にある。再帰、相互、受動、非人称などは互に内的に結束する必然性があるからこそ、se という同一形式に収斂し、他言語にも同一の分布パターンが見られるのである。寺崎氏の主張は、同一形式から派生する転義は言語が異っても似たようなものがあるという経験則を述べただけで、再帰辞がなぜ異言語において現代スペイン語が示すような内容の変現性を持つかに関して何も説明し得ない。

II

5. 寺崎 (1982) は、拙稿 (1972, 1975) を含めた変形文法による分析を熾烈に非難するための基盤となった自説 (1974, 1976), i. e. “非人称の se” 独立説を撤回し、別種の分裂説を出している。

ただし、それは古くからあるタイプの se 分裂説で、最近においては Otero (1966), Perlmutter (1971), Bobes Naves (1974), Westfal (1978-9, 1979) などがこの立場を支持している。寺崎 (1982) は従来の議論を補強する新証拠を出しているわけではないが、この章で、その主張の要点を見て行こう。

寺崎 (1982) の中心論点は、何らかの意味で再帰性と結びつけられる《再帰的な se》から《不定の se》を切り離さなければならない (p. 342) という主張にある。氏に従えば、《再帰の se》は ‘自己再帰’ ‘相互’ ‘自動詞化’ ‘強意’ の se を包括し、《不定の se》とは ‘不定人称’ 及び ‘受動’ の se を指す (p. 346-7)⁽⁵⁾。

5.1. まず第 1 に、‘不定人称’ と ‘受動’ の se は人間主語を要求する動詞と共起するが、他の種類の se にそのような制約がない事実は(11)のように《不定の se》《再帰の se》が区別される根拠と寺崎 (1982 : 345) は見る。

(11) 不定人称・受動／自己再帰・相互・自動詞化・強意

しかし(11)の区分は se 諸構文の基底主語が〔+human〕に限られる否かを基準とした、一つの種類であるにすぎない。寺崎 (1982) は諸々の再帰構文の意味(基底)構造に関してなされ得る以下の分類をすべて考慮外に置くのである。

基底主語が〔+animate〕でなければならないか否かを基準にすると(12)のグループ分けが可

能である。

(12) 不定人称・受動・自己再帰／相互・自動詞化・強意

〔-animate〕の基底主語を要求するか否かで se 構文を2分すれば(13)となる。

(13) 自動詞化／不定人称・受動・自己再帰・相互・強意

基底主語の意味素性に個体複数、集合概念が前提されるかどうかを分岐点に使えば(14)のクラスが分離される。

(14) 相互／不定人称・受動・自己再帰・強意・自動詞化

次の二分法は基底主語が非明示(不定)要素であるか否かに基く：

(15) 不定人称・受動・自動詞化／自己再帰・相互・強意

Patient である基底の直接目的語を持つか否かで、さらに(16)のように2分される。

(16) 自動詞化・自己再帰・相互・受動／強意・不定人称

二つの同一指示名辞が基底に共存するか否かを判定に用いれば(17)の対立となる。

(17) 自己再帰・相互／自動詞化・強意・受動・不定人称

動詞と意味格との関係が自己内完結的 (i. e. 明示外部 Agent がない) に限るか、そうでないかで(18)の2種別ができる。

(18) 自己再帰・相互・自動詞化／受動・不定人称・強意

表層主語が意味役割上の Patient を演じているか否かを基準にすれば(19)の分裂を得る⁽⁶⁾。

(19) 自己再帰・相互・自動詞化・受動／不定人称・強意

表層主語が〔-animate〕の明示主語であり得るか否かに関して(20)の分類が可能である。

(20) 自動詞化・強意・相互・受動／自己再帰・不定人称

‘強意’を除いてすべてのタイプは、文中に NP が現われるとき、そのうちの一つは非 Agent を表わす：

(21) 自己再帰・相互・自動詞化・不定人称・受動／強意

se に帰される機能が動詞意味を構成する必須の参与辞項かどうかを区別すれば(22)の対照が生じる。

(22) 自己再帰・相互・自動詞化・不定人称・受動／強意

以上列举した、意味を手掛りとした再帰文の2項区分12種類の中で(11)のみを se の区分として正当化するためには次の4つの段階を踏まなければならない。

(23) 1° (11)が他の区別法の根源であることを示すため、(12)-(22)の対立が(11)から自動的に条件づけられる分類であることを証明するか、ないしは(12)-(22)の binarismが《再帰の se》《不定の se》のどちらかの下位区分であり、交差していないことを証明すること。

2° (11)と同じパターンで区別される相当数の、つまり“特性の束”と呼ばれ得る、いくつかの意味規準を示すこと。

3° 意味上、《不定の se》と《再帰の se》構文が対立することを証明すること。

4° 上の対立が構文中に含まれる他の要素に帰され得ず、“se” に源をもつものであることを証明すること。

寺崎 (1982) は上述 1°~4° のどれ一つも示していない。従って《再帰の se》《不定の se》という二つの“se” の存在に対する、“積極的な意味的根拠 (p. 345)” はその端緒から破綻を見せるのである。

5.2. 寺崎 (1982) は次の Garcia (1975) の考察を前出 (11) の 2 区分を支持するものと解釈する (p. 345)。Garcia によると (24) は 2 義的で、NP が代名詞化すると (25) のように相違が顕在化する。

(24) Se quemaron los libros.

(25) a. Se los quemó. 「焼かれた」

b. Se quemaron. 「焼けた」

この文例は (24) の los libros が ‘高い主語性をもつ NP’ ‘低い主語性の NP’ の両価性をもって使用されることを示す。後者の読みでは、呼応は成立するものの他の統語面で直接目的語としての振舞をも示し、二つの文法関係を分有する。その為に代名詞化において (25 a, b) の差が生じ得ると考える。寺崎氏は los quemó/quemaron の違いが se_1/se_2 の対立によるとみなすが、その根拠は何か。筆者は二重の意味において、引用例が《不定の se》vs. 《再帰の se》を裏付けているとは考えない。第一に、たとえ se_1/se_2 が対立し得たとしても、それは (26) の区別を示唆するのであって、氏の主張する 2 分法パターン (11) を掩護しない。

(26) 不定人称・受動／自動詞化

第 2 に (24) (25) は 2 種類の se 構文を暗示するけれども、2 種類の se が対立し仮定されなければならないことを証明していないからである。

5.3. 寺崎 (1982, p. 345) は述べる：

“ある種の動詞は《再帰的な se》が付加されると強意の意味⁷⁾をもち、《不定の se》がつく場合はそうはならない”

(27) (El) Se come el pastel.

(28) Se come arroz en Japón.

論意のわかりにくい一節である。《再帰的な》とは氏の定義で ‘自己再帰・相互・自動詞化・強意’ を指す。ところでこの 4 種類の se が付くとどうして“強意の意味” になるのだろうか。もし、その 1 subtype である ‘強意の se’ が付くと強意の意味になるということなのか。また《不定の se》は ‘不定人称’ と ‘受動’ から成ると定義されているのであるから、強意の意味を持たないのは当たり前である。‘強意の se’ 構文と《不定の se》構文を対比して見ても、(11) の対立型の根拠となり得ないのは明白であろう。

5.4. 統語面から、寺崎 (1982 : 346) は文法的主語の義務性を se 2 分論と関連づけようとする。

その際 (29 a) は主語を欠くとみなされる。

(29) a. Se vende libros.

b. Se venden libros.

この規準は意図とは裏腹に《不定の se》の一体性を崩し、‘受動の se’ (29 b) をむしろ《再帰の se》グループへ加えてしまうので、当初パターン(11)とは異なる(30)の分裂が正当化されることになる。

(30) 自己再帰・相互・自動詞化・強意・受動／不定人称

5.5. 《再帰の se》は主格人称代名詞と共に起し得るが、《不定の se》は共起できない (p. 346) という寺崎の論点もまた追加の data によって自らを裏切る結果となる。即ち、‘自動詞化の se’ の重要な部分として、主格人称代名詞と両立しないクラスの構文が存在するからである。

(31) *El se derritió. (=el hielo)

(32) *Ella se abrió. (=la puerta)

出された規準は、従って(11)とは別個の次の2区分を作るはずである。

(33) 不定人称・受動・自動詞化_A／自動詞化_B・自己再帰・相互・強意

5.6. Suñer (1975) を承けて、寺崎 (1982) は

“《再帰的 se》はそれをふくむ文が埋め込まれても保存されるが、《不定の se》は不可である”

と述べる。Knowles (1975), Westfal (1978-9, 1979) で論議された、不定形とある種の se 構文の両立性は informant の判断に揺れの見られる、不透明な領域と考えられるが、寺崎氏の引用する Suñer の例文は《再帰的な se》の一下位タイプ i. e. 自己再帰文と、《不定の se》の subtype の一つ ‘不定人称の se’ 文の中の一種類との対照を示唆するだけである。相互・自動詞化・強意など全《再帰》タイプが《不定》の全種類と対比される資料を明らかにしなければ、(11)で表わされる se 構文の2大別の確証とならないだろう。

5.7. 同氏が論拠としてあげる最後のものは se の直後における、直接目的語 clitic le/les の使用である。

(34) Se les esperó durante horas.

方言・個人語間に少なからぬ変異が見られる不安定な現象を基準に採用すること自体、感心できないが、仮に(34)の類文で les の代りに los を用いるのが非文法的とする厳然たるルールがあるとしよう。その場合でも、この対立は寺崎 (1982) の se 分裂論に支持を与えるものではない。なぜなら、ここで問題になっているのは(35)の分立で、(11)のパターンと似ても似つかぬものだからである。

(35) 不定人称／自己再帰・強意

5.8. 統語上の相違特条をとらえて、再帰構文の類別を試みると、他にも、寺崎氏の主張する《再帰の se》対《不定の se》からはみ出す多様な2分法の図式が次々に浮び上がってくる。例

例えば、動詞のパラダイムが全称的(すべての人称・数に及ぶ)か否かでは、(36)の分立が得られる。

(36) 自己再帰・自動詞化_B・強意／相互・自動詞化_A・不定人称・受動

動詞語形が3人称に限定されるかを基準として(37)の対立が成立する。

(37) 不定人称・受動・自動詞化_A／自己再帰・自動詞化_B・相互・強意

動詞が時制つきの場合、3人称単数形のみで生起するか否かを示すのが(38)である。

(38) 不定人称／自己再帰・相互・自動詞化・強意・受動

a + 強形再帰代名詞 + mismo との共起性に基いて次の分類も可能である。

(39) 自己再帰／相互・自動詞化・受動・不定人称・強意

clitic 以外の表層直接目的語を取り得ないかどうかを見れば(40)の弁別が生じる。

(40) 自動詞化・受動・(相互)／不定人称・自己再帰・強意

表層主語 NP をとり得るか否かで(41)のように se 構文のタイプが分けられる。

(41) 自己再帰・相互・自動詞化・強意・受動／不定人称

また、必ず基底直接目的語をとるタイプとそうでないものとで次の対立が見られる。

(42) 自己再帰・自動詞化・受動／相互・強意・不定人称

5.9. 上で見た(12)-(22), (36)-(42)は再帰構文の網羅的分類を意図するものでなく、具体例を省いた概括に過ぎない。その道具となる用語も正確に定義されたものではないので、範疇の細分割が不可欠となるケースもある。従って、細かな吟味を加えれば修正を受けるとしても、このような多彩な se 再帰構文の二分型の中で、(11)の《再帰の se》vs 《不定の se》がなぜ特別な扱いを受ける二つの se なのかという疑問が根拠のないものでないことを示すには十分であろう。

5.10. 寺崎 (1982) は ‘自己再帰・相互・自動詞化・強意’ を《再帰的な機能》の実現とみなし(43)-(45)の se が “何らかの意味で再帰性に結びつけられる (p. 342)” と主張する。

(43) Los vasos se rompieron.

(44) Juan se ha olvidado del nombre.

(45) Maria se fue.

しかし、具体的にどのようにそれが再帰性と結びつけられるのかは示されていない。この点の解明がなされないと、なぜこの4種の下位タイプが内的なまとまりを保ちながら、《不定の se》と異なる機能で対立関係にあるのか理解できないのである。寺崎氏の ‘2つの se’ 論によれば、《再帰の se》に分類される(47)は、《不定の se》に属す(46)と別機能として隔てられるのに対し、(48)とは同じ仲間内の機能的に同じ se とみなされる。

(46) 〔不定〕 Las ramas se rompieron (para hacer fuego). Cano Aguilar 1981:288

(47) } Las ramas se rompieron (por si solas). Idem

(48) } 〔再帰〕 María se comió todo el plato.

受動と自発の意味差がしばしば一般の native speaker に気づかれず、そのどちらでもない中間的

な理解をされるという Garcia (1976: 364) の所見も的はずれとも思われず, se + 動詞は両方の解釈に中立であると考えることができる. とすれば, (46)と(47)の間に厳密な線引きを行ない(47)と(48)を一まとめにする理由は一体何なのだろうか.

5.11. §5 の各節で, 寺崎 (1982) が寺崎 (1974, 1976) に代えて展開する《再帰的 se》/《不定の se》2分説はその証拠を欠くことに言及した. 《再帰の se》の構文が“その基底主語に必ずしも人間であることを要求しない”というのを, 百歩譲って寺崎氏のいう“積極的な”“別の機能”として承認したとしても, それは2分説の証拠ではなく, 証明すべき命題であろう. 多数の中から選ばれたその規準と同じ対立型を見せる別の基準を提示することによって始めて, それが一つの evidence となり得る. 要するに, 基底主語が義務的に [Human] であるか否かによって, se 構文が2分できるという既知を寺崎 (1982) は確認しただけであって, この分割が各種の se を2分立させる根幹であるという論証に成功していない. もし単一の基準でもって, 《Xの se》, 《Yの se》と2種類の se を認める積極的証拠となり得るのならば, 本章で見たような何通りもの《Xの se》, 《Yの se》対立図式がみな正当化されなければならない.

III

6.1. 《再帰の se》対《不定の se》を特徴づける示差的な統語・意味特性群が発見されなかったのとは対照的に, (1)~(4)構文及び前章で分類された6種の下位タイプのすべての文に共有されている一つの形式には, 次の特徴の束が認められる⁴⁹⁾.

- (49) i) 音形 [se] をもつ
ii) 非強勢であり, 語強勢も文強勢も帯びることができない
iii) 動詞に付接されずに自立することができない
iv) 時制動詞形には前接されなければならない
v) 肯定命令動詞には後接され, 否定命令動詞には前接される
vi) 動詞不定形に前接されることはない
vii) 別の clitic の直後に立ち得ない
viii) 過去分詞に付接しない
ix) 節結合・節縮約の構文で, 前位の定形動詞へ移付する
x) 動詞に間接付接することがあるが, clitic 以外の要素を動詞との間に介在させることができない
xi) 否定辞に後行する
xii) 他の文要素や形態素と接続詞で連立され得ない
xiii) 分裂文の focus の位置に立つことができない
xiv) 目的語繰り上げの victim になれない
xv) 形容詞句で修飾されない

xvi) 関係節の先行詞になれない

以上のような共通特性の束が文(1)-(4)の *se* に認められる事実は“*se*”を一つの形態・統語単位であるとみなすに十分な証左であろう。(1)-(4)の文型や‘自動詞化の *se*’タイプの文の相互間に意味構造型の異なりがあるのは当然であるが、それにもかかわらず、(6)で表現された意味・統語上の共通属性が存在し、それは(50)としても一般化された(出口1978a : 12)。

(50) 統語上 *n* 項を支配する動詞に、(*n*-1) 個の成分が意味に参与するとき、*se* が現われるこの統語・意味的な凝固剤が上述の統語・形態的同一性を現示し、諸々の *se* 構文の一体性を支えているというのが *se* 統一仮説(1978a)の論旨であった。

表層の *se* を解釈する視点から上述の原理を見直せば次のようにとらえることもできよう。(1)-(4)のどの場合でも、*se* の内包は一つであって、動詞が結合価をもつ項数 *n* より1項減価した意味参与者で文命題が実際に成立することを mark する機能とみなされる。文(4)を例にとれば、Maria のみが“洗う”という事象に参画することを指示するのが *se* の意味である。そして、通常、Maria が Agent と Patient を兼務する“Maria が自分を洗う”という解釈が文法的含意(implicature)として付与される。一方、類型(1)-(3)においては、*se* の出現によって減じた参与者は、動詞の性質、名詞句の統語・意味素性を照合した後、不定の主語であると推定される。

‘主語・目的語兼務’‘不定主語’‘非使役化’etc. の文法的含意は余剰的に他の語句で重ねて表現され得るし、反対に明示的に表出される他意で cancel されることもある(p. ej. a si mismo, mutuamente, por si mismo)。このように *se* の核的意味と文法的含意を分離すれば、前出(46)(47)文の相違は、*se* の含意の差として、より自然に説明できるであろう。すなわち、las ramas は Agent ではないので目的語を兼務することはできず、‘不定主語’と‘非使役’の含意が許されるが、para hacer fuego や por si solas の挿入によって、矛盾する文法的含意は取り消されて、各々、‘不定主語’、‘非使役’の解釈が得られる。

「*se*」が統語部門のルールで導入されるか、語彙部門の派生関係として把握されるかは、*se* の本質としての規則性そのものと無関係である。いわゆる‘自動詞の *se*’ v.g. levantarse が、語形成規則の一種により Lexicon の内部で生産的に作り出されるとしても、そこに働く(*n*-1)原則は、より syntactic なプロセス“受動”における *se* の生起と同じ動機づけをもつことを見逃してはならないと思われる。

6.2. もし《再帰の *se*》と《不定の *se*》が、寺崎(1982 : 337)の主張するように、異なる機能を表示しているとすれば、(51)-(53)が非文法的である説明がつかない。

(51) *Se se lava.

(52) *Se se alegra.

(53) *Se se lo come.

これらがスペイン語文法で生成され得ない理由は、統一説のシステムでは明白であるが⁽⁹⁾、分裂

説は *se se 制約のような ad hoc で説明力を持たない何らかの装置を導入するか、「se」の前史を持ち出さねばならない。

寺崎氏の分裂説はここでも救い難い破局に瀕するのである。同一音形の連続が忌避されるのではないことは例文(54)からも明らかである。

(54) *Se quiere bañarse.

また、同語源である同音異義形式が共起できないという法則もないことは、ir+a+inf の例から確められる。

(55) a. Va a comer (al restaurante).

b. Va a comer (aquí).

(56) Va a ir a comer allí.

6.3. 次の例文は《再帰の se》と《不定の se》が機能的に対立するという見解を根底から揺がすだけではない。

(57) a. *No se vendieron los libros sino se vendieron los libros.

b. *No se vendió los libros sino se vendieron los libros.

(売られたのではなく売れた)

上例では《再帰の se》を含む文と《不定の se》を含む文の、二つの構文すら機能的に対立し得ない。従って、寺崎(1982)が擁護する《再帰》《不定》の se 機能分離説を正当化するためには、次の論理的3段(大)飛躍を行なわねばならない。

(58) 1° ‘自動詞化’の se 構文が‘不定人称’又は‘受身’の se 構文と対立する

2° ‘自動詞化’の se が《不定の se》と対立する

3° 《再帰の se》が《不定の se》と対立する。

筆者はこのような論法を認めることができないので、寺崎(1982)の結論に不賛成であり、逆に、‘自動詞化の se’と‘受動の se’は“機能的に一つ”なのではないかという疑問を懐く。

6.3. 以上見て来たように、拙論(1975, 1978 a, b)に対する寺崎氏の細微にわたる論難は、それらが

1. 実在しない捏造された論点への反論

2. 誤解に基く断章的解釈

3. 反証、反例、論理的不整合を指摘しない主観的感想

を主調とするゆえ、学的批判になり得ないことがわかった。

また提出された対案、寺崎(1982)の「二つの se 論」は、一つの意味基準による再帰諸構文の分類の追認になり得ても、二つの異なる se 形式と se の内包が存在することを立証していないことを明らかにした。さらに、これまでに提案された数多くの種類の分裂説[寺崎(1974, 1976)を含む]を排除して、なぜ《再帰的 se》vs《不定の se》が正当化されるのかを論証する視点が見られない点も付け加えておこう。

スペイン語文法史上、論者を換え外観を変え、次々に登場してきた *se* 分裂説には三つの独特な流儀があるように思われる。

まず、*se* がどのように異なるのか、*se* 構文の異なり方の質、その文法的資格を不問にしたまま、*se* が二つある、三つの *se* が存在する etc. …と主張してやまない態度である。わかり易い譬えを使えば、/a/と/d/のように異なる二つの *se* があるのか、[d] [ð] のような異なりが問題になっているのか、[d] [ɟ] [d] に類する差異に言及しているのかを明確にしない姿勢である。

第2は、拙稿 (1978 a, to appear) でも本稿でも再三指摘したが、「前件」である *se* 構文の異なりをそのまま、‘異なる *se*’ の根拠と解する習癖である。これは *post hoc, ergo propter hoc* の誤まりである。

第3に、この種の論調は *se* 構文の外的多様性を誇示することによって、それだけで、*se* の内包を規定しようとする試みが無駄であることを説得できるという先入見をもつ。

事象の規定へは内包と外延の両面から迫ることができる。従って、どれほど *se* 構文の種類を精密化し、体系づけ、外延によって *se* を規定することに成功したとしても、そのことで、拙稿が主張した “*se*” の内包が自動的に否定されることにはならないし、又、いくつかの *se* 構文タイプに共通の内包があるとする *se* 統一説が痛痒を感じることはない。

皮肉なことに、多彩な *se* 構文のタイプ・下位タイプを細別し、最も包括的に再帰諸構文の類型や異同を論じたのは、それらに何らかの共通性や統括的特徴を見ようとした Cartagena (1972) Schrotten (1972), Garcia (1975), Martin Zorraquino (1979) など、統一論者の方だったのである。

内包と外延、本質と多様性、普遍性と個別を対立的にみて一方を疎んじるべきではない。ちょうど Linguistic Universals の研究が Linguistic Typology の確立に相反するものでなく、相互に前提し互に補い合うように、「*se*」の究明にもこの両面性を真剣に考慮すべきと考える。

〔注〕

- (1) 他の諸要件を省略し、大幅に単純化されている。
- (2) 後出(49)で表層 clitic の非 NP 的性格が明らかにされる。
- (3) しかも自動詞が直接目的語をとらないという見方は“対格言語の世界観”の曇ったレンズを通して歪められた像であり、この点については出口 (to appear) で触れた。
- (4) これは新奇な概念ではなく、既に Jespersen (1924: 160)でも、主語と目的語の親近性が言及されている。
- (5) このような伝統的な分け方が *se* 構文の分類として適切なものかどうかの問題は追求しない。ここでは反論をわかりやすくするため、“自己再帰”を除いて、寺崎 (1982) で用いられた用語を便宜的に借用する。
- (6) “中動”の概念を介して、古くから指摘されている‘自己再帰’と‘受動’の類似点はこれである。例えば Gómez Molina (1981: 156) が‘自己再帰’を‘受動’の *variante* とみなし《*pseudopasivo*》と呼称するのも故なきことではない。
- (7) 筆者はこのタイプの文に生起する “*se*” を「強意」と考えていない (cf. 1978 b, d.)
- (8) 各事項を個別に証拠だてる data・文例はこれまでの論争に再三登場しているので省略する。付接辞の一般的性質については出口 (1979), xiii) 及び xiv) については出口 (1978 c) を参照されたい。
- (9) 拙稿 (to appear) で扱ったので再論を避ける。

REFERENCES

- Aissen, Judith and D. M. Perlmutter (1976): Clause reduction in Spanish. -BLS 2, 1-30
- Bobes Naves, M^a del Carmen (1974): Construcciones castellanas con 'se'. Análisis transformacional. -Revista Española de Lingüística 4, 87-127; 293-325
- Cano Aguilar, Rafael (1981): Estructuras sintácticas transitivas en el español actual. Gredos. Madrid
- Cartagena, Nelson (1972): Sentido y estructura de las construcciones pronominales en español. Universidad de Concepción.
- 出口 厚実 (1972): se 受動文と再帰動詞のシンタクシス. —HISPANICA 16, 1-16
- (1973): 格文法とスペイン語再帰文の動作主格. —Estudios Hispánicos 3, 57-93
- (1975): se はどこから来るか—スペイン語再帰動詞について—HISPANICA 19, 70-84
- (1978 a): スペイン語 se 統一仮説に向けて, 一大阪外大学報42, 1-14
- (1978 b): 関係文法とスペイン語の反受動文・再帰受動文. —Estudios Hispánicos 5, 19-32
- (1978 c): Antipassive and reflexive passive in Spanish.—Lingüística Hispánica 1, 54-74
- (1978 d): 「主語性」の概念とスペイン語の不完全主語文. —HISPANICA 22, 15-29
- (1979): 動詞の内部構造と付接辞嵌入について—Estudios Hispánicos 6, 19-31
- (1981): 動詞呼応の類型 (その 4). 一大阪外大学報54, 1-20
- (to appear): se 同音異義語説への疑問
- García, Erica C. (1975): The role of theory in linguistics. The Spanish pronoun system. North Holland. Amsterdam.
- (1976): The generative approach to the Spanish reflexive. -Romance Philology 30, 361-89
- Gómez Molina, Carmen (1981): Las formas pronominales de tercera persona en los verbos transitivos. -Lingüística Española Actual 3, 73-157
- Jespersen, Otto (1924): The Philosophy of grammar. George Allen & Unwin, London
- Martín Zorraquino, M. Antonia (1979): Las construcciones pronominales en español. Gredos. Madrid
- Perlmutter, David M. (1971): Deep and surface structure constraints in syntax. Holt, Rinehart and Winston
- (1981): Relational grammar. -(eds.) Moravcsik, E. A. and J. R. Wirth. Syntax and Semantics 13, 195-229.
- Perlmutter, David M. and P. M. Postal (1977): Toward a universal characterization of passivization. -BLS 3, 394-429.
- Schroten, Jan (1972): Concerning the deep structure of Spanish reflexive sentences. Mouton
- 寺崎 英樹 (1974): スペイン語のいわゆる非人称および受動の se —小樽商科大学「人文研究」47, 17-34
- (1976): スペイン語非人称再帰文における“se”の機能—小樽商科大学「人文研究」52, 167-184
- (1982): se 統一説と se 分裂説—宮城昇教授還暦記念論文集, 335-349
- Westfal, Germán F. (1978-9): The two-source analysis of the Spanish impersonal *se*. -Language Sciences 1, 133-158
- (1979): Subjects and pseudo-subjects in Spanish. Linguistic Research. Edmonton.

(1982年 5月15日)